

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第208号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2022年6月21日

オオアカゲラ



2022. 4. 9 真駒内公園 (札幌市南区)

撮影者 平岡 信夫 (東京都品川区)



も く じ

野鳥の死因を探る必要性と法獣医学	酪農学園大学教授 浅川 満彦 ……………	2
“浜千鳥”(シロチドリ)を守る「淡路島ちどり隊」始動	札幌市豊平区 立田 彩葉 ……………	4
【バードウォッチャーズ・スケッチブック】		
飲み会の言い訳でも カササギ	札幌市中央区 本間 康裕 ……………	6
【私の探鳥地】 鵡川流域で観察した7種のガン		
	胆振管内むかわ町 門村 徳男 ……………	8
シロフクロウ撮影記 ～探し続けて31年 5度目の正直～		
	紋別市 大館 和広 ……………	10
2021年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録 (2021.4～2022.3) ……………		11
2022年度総会報告 ……………		12
探鳥会ほうこく ……………		14
表紙の鳥	東京都品川区 平岡 信夫 ……………	15
探鳥会あんない ……………		16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

野鳥の死因を探る必要性と法獣医学

酪農学園大学教授 浅川 満彦

＜動物の死因を探る法獣医学の夜明け＞

野鳥死体の多くが腐敗・変性し、時には体の一部しか残っていないのが普通ですので、自治体や警察などがこれらの死因を知るために、大学の獣医学部に持ち込んでも、病理の専門家は受け入れ拒否をする可能性が高いのです。日本の獣医学では、高度変性した死体から死因解析をする科学分野（法獣医学）が未熟だからです。だから、野鳥に詳しい皆さんの元へ問合せが寄せられるかもしれません。そして、最後には、問題の死体は生ごみとして廃棄されるのでしょうか。

その時、「ちょっと待った！」とって登場するのが私たちです。腐った死体であっても、寄生虫病を含む感染症の病原体検査には使え、野生動物医学や医動物学（寄生虫や衛生動物を対象にする分野）の振興に寄与する人が多いのです（浅川 2022a）。いや、むしろ、こういった死体が無いと研究が出来ません。したがって、北海道野鳥愛護会のご支援の有無が死活問題のため、拙稿のようなアピール文となりました、その研究成果のごく一部は、「北海道野鳥だより」162号（浅川2010）で紹介させて頂きました。また、本会ともつながりが深く、私の長年の同志である釧路市動物園の吉野智生学芸員が、もっと詳しいお話をレクチャーしてくれるでしょう。ですので、ここでは冒頭の死因の話に戻ります。

この分野は今、転機を迎えつつあります。まず、その胎動は約20年前の欧米で、イヌやネコなどのペット動物

の虐待を立証する分野として、法獣医学が創学されたことです。その後、日本では動物愛護法が厳格化されたことも追い風となり、2022年3月12日、日本法獣医学会第1回学術集会在開催されました。私の演題を含めた10演題と発展途上ですが、無いよりはましです。

＜野鳥の死因解析は五里霧中＞

ただし、野鳥となると、ハードルは高いのです。獣医学では家禽を除くと、鳥類医学・医療分野が遅れているからです（浅川 2022a）。そのようなこともあり、2004年4月、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業で設置された酪農学園大学野生動物医学センター（以下、WAMC）では、生体・死体問わず野鳥を搬入し、その改善に寄与してまいりました。

とりわけ、野鳥の死体はこの分野の研究・教育に大いに貢献しましたが、その提供を受けるために、無茶な条件が発生しました。それが冒頭で紹介した死因解析でした。繰り返しますが、私たちの死因解析は目的ではなく手段なのです（手段の経験も無し）。それに加え、地域に愛される大学は社会貢献をせよという、無言のバイアスも背景に加わって来ました。確かに、突然現出したカラスやスズメなどあまたの野鳥の死体の死因解析は、社会の安寧に繋がることは明らかです。それなら、野鳥の法獣医学の専門家が育成されるまで、肩代わりするのは仕方がないのでしょうか。

そうです。監察医の真似事のきっかけは、正義感ではなく、研究遂行のためでした。それでも、十数年続けると、一冊の書籍（浅川 2022b）に結実するまでになりました。その章構成は次の通りです（章題を列挙します）。

- 第1章 なぜ牛大学に野鳥が来る？
- 第2章 どのような死があるのだろうか？
- 第3章 身近な鳥類の大量死はなぜ起こる？
- 第4章 人間活動が不運な死をもたらす
- 第5章 哺乳類と爬虫類の剖検は命がけ
- 第6章 野生動物の法獣医学とは？

終わりの2つの章以外は野鳥の解析事例のみを扱い、中には「北海道野鳥だより」167号（吉野ら 2012）で紹介された事象も含まれています。そして、その舞台はほぼ全てが北海道ですので、ぜひご一読下されれば幸いです。

<資源の無い国の民が加害者>

いまさらですが、その北海道の産業と云えば畜産で、日本の食糧自給を牽引していると「錯覚」している方も多いと思います。ところで、日本の総合食料自給率（カロリーベース）が40%未満であることは、最近、何かとやかましいのでご存じかと思います。だが、これを下回るのが、家畜に与える飼料の自給率で、約25%であり、残り約75%が輸入されている事実はいかがでしょう。多くは濃厚飼料の原料となるトウモロコシですが、牧草（乾草）など粗飼料ですら相当量が輸入されているのです。もちろん、乾草ロールもほとんどが輸入ものです。実は、これが野鳥の法獣医学案件に密接に関わることもあります。

その乾草ロールですが、本文をご覧になる多くの皆さんが北海道に起居されるので、そのサイズ感はご理解できるでしょう。とにかく大きいのです。そのため、輸入時に、異物をくまなく検査するのは不可能なので、国外動物の死体あるいはその一部が、この中からしばしば発見されます。当然、そのようなモノと一緒に、国内には知られない病原体が持ち込まれる危険性があるわけです。

たとえば、2010年に国内で発生した口蹄疫では、東アジア地域からの餌用稲ワラにウイルスが付着していた可能性が指摘されました。さて、その同時期、日高管内日高町の競走馬飼槽で野鳥の死体が発見されました。与えていた牧草は北米ワシントン州から輸入されたロール状のものです。馬への健康被害を心配した牧場主は、道庁に通報し、私たちの元にその死体は送られました。その結果、ホシムクドリと同定されました（写真1）。この鳥は北海道では希ですが、ヨーロッパ東部などから人為的に持ち込まれた分布域として北米にも多数生息し、ウエストナイル熱ウイルスの重要な保有宿主種でもあります。

さて、死体ですが、完全にミイラ状でした。この状態になるまで自然乾燥するには、乾草ロールから飼槽に移す程度の時間ではあり得ません。また、この鳥の日高町での記録はそれまで無く、輸入乾草ロールに紛れ込んでいたとしました。この標本は、WAMC主催の公開講座等

で必ず見せ、日本の畜産事情（もはや第1次産業ではなく、原料を輸入に頼る加工業としての第2次産業になっていること）を示す資料としています。



写真1. 日高町の競走馬飼槽で見つかったホシムクドリ死体（上：背側全体像、下：頭部拡大像）

事程左様に、野鳥の死因解析を通じ、食料（食糧）、水、エネルギー等の資源の状況を顧みることになりました。要するに、日本社会の営みの過程で、多くの野鳥が死んでいる事実です。つまり、国民すべてが当事者（加害者）で、もちろん、野鳥を誰よりも愛する皆さんも含まれます。なお、この本（浅川 2022b）のエピソードは、週刊少年サンデー（小学館）で連載中の『ラストカルテ―法獣医学者 当麻健匠の記憶』（作 浅山わかび）でも触れています。そちらも併せてご覧下さい。

<もし、死体を見つけた場合>

野外で野鳥などの野生動物の大量死を目にされた際、種や場所によって対応する行政・公的機関は異なりますので、再確認願います。また、適切に連絡し、その指示に必ず従い、死体に無闇に触ることはお控え下さい。

引用文献

- 浅川満彦 2010. 北海道野鳥だより162:45.
- 浅川満彦 2022a. 野生動物医学への挑戦-寄生虫・感染症・ワンヘルス. 東京大学出版会:196 pp.
- 浅川満彦 2022b. 野生動物の法獣医学-もの言わぬ死体の叫び, 地人書館:254 pp.
- 吉野智生 2012. 北海道野鳥だより167:45

“浜千鳥” (シロチドリ) を守る「淡路島ちどり隊」始動

札幌市豊平区 立田 彩 菜

<チドリとの出会い>

「北海道って自然豊かなイメージがあるけど、札幌の街中は意外と緑が少ない。自分の故郷を、もっと緑あふれるまちにできないだろうか…」

そんな漠然とした思いを抱え、自分にできる事を探しに一念発起。7年勤めたテレビ局を辞め、兵庫県の淡路島にある大学院への進学を決めました。学校では、ガーデニングやランドスケープ、まちづくりや保全など、幅広い分野を学びました。当初、私の研究テーマは、南あわじ市にある景勝地・慶野松原の資源を調査し、活用方法を提案するというもの。その調査の中で、ある1枚の写真に出会ったのです。

「かわいい！これは絶対、アイドル的存在になれる」。

そこに写っていたのは、砂の窪みに入って休むシロチドリの姿でした（この写真は掲載が難しいので類似の写真1をご覧ください）。

慶野松原は島内最大のシロチドリの繁殖地で、チドリのメッカと呼ばれていました。このかわいらしい鳥たちに会いたい！と、早速、地元で50年以上、観察を続けている竹田俊道さんに案内してもらいました。2021年5月のことですが、そこで衝撃的な事実を知ることになりました。シロチドリは、慶野松原から姿を消していたのです。



写真1. 慶野松原のシロチドリ
(1970年ごろ 山崎博道さん撮影)

<消えたシロチドリ>

「淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に 幾夜ねざめぬ 須磨の関守」 (源兼昌)

日本では昔から「千鳥足」「千鳥模様」など様々な場面に使われてきたチドリですが、とりわけ兵庫県の淡路島では百人一首でも詠われるくらい、シンボルバードとして親しまれてきました。かつては「淡路島チドリ研究所」が設立され、人工繁殖（写真2）の取り組みが行われていたこともあるほど。島内ではシロチドリ、コチドリ、イカルチドリの3種類のチドリ類が繁殖していて、特に砂浜で繁殖するシロチドリは昔から“浜千鳥”の名で親しまれてきました。シロチドリは環境省で絶滅危惧Ⅱ類、兵庫県レッドデータブックではAランクに選定されてい

ます。北海道でも数は少ないですが、過去に繁殖が確認されています。淡路島でシロチドリの研究をする山崎博道獣医師はかつてオホーツク管内斜里町で獣医師の研修をしていたようで、1972年に道東の風蓮湖で2つがい繁殖しているのを確認したそうです。



写真2. 淡路島チドリ研究所での人工繁殖の様子 (1991年ごろ)

その山崎獣医師の記録によると、淡路島では1970年ごろ、約100羽のシロチドリが観察されていました。特に慶野松原は約2kmにおよぶ白砂が豊富な餌を供給し、多いときには13つがい200mごとに縄張りを持って巣を作ることもあったそうです。しかし竹田さんによると、2000年代に入って浜の一部にビーチバレーコートが造成され、ビーチクリーナーが縦横無尽に走るようになり、松葉を焼くための焼却スペースも設けられました。なんとか卵を産み続けた個体もいましたが、ビーチクリーナーに踏みつぶされるなどし、2008年を最後についに営巣は確認されなくなりました。

私がこのことを鳥で知り合った地元の人たちに伝えたところ、「いて当たり前だと思っていたのにショック」「全然知らなかった」と大きな衝撃を受けている様子でした。そして「今からでも何かできることはないだろうか?」「戻ってきてほしい」と、チドリの復活を求める声が少しずつ大きくなっていったのです。

<シロチドリの繁殖環境はギリギリの状況>

こうしたことをきっかけに、私はチドリの調査を始めました。2021年6月から8月にかけて、島内3か所の砂浜でシロチドリ、コチドリ、それぞれ5つの巣を見つけましたが、このうち無事に孵化したのは、コチドリ2巣のみ。シロチドリは外敵に捕食されたり、台風で流されたりと結局1巣も孵りませんでした。ことごとくカラスに食べられ卵がなくなる砂浜、人の出入りが頻繁で踏みつけによる危険性が高い砂浜など、繁殖状況は極めて厳しい状況にあったのです。さらに2021年11月～2022年2月に、過去に生息が確認されている島内7か所の砂浜で行った越冬個体数の調査では、シロチドリ（写真3）は50年前に比べ約3分の1まで激減していることが明らかに

なりました。

激減した主な理由に、繁殖地である砂浜の減少があります。さらにこのコロナ禍で屋外のレジャー利用が急増し、減った砂浜に多くの人が押し寄せるようになりました。ある浜では巣のすぐ近くを人が頻繁に行き交い、キャンプ客が残っていたゴミにカラスが群がる姿を何度も目撃しました。チドリの繁殖環境は、もう限界のところまで来ている…。調査と並行して観察会や勉強会を開き、現状を地元の人たちに伝えていきました。「巣をカラスの捕食や踏みつけから守る方法を知りたい」という要望が出たので、千葉県九十九里浜で実践されている営巣保護柵を取り入れ、地元の人たちと試験的に設置(写真4、5)したりしました。

こういった取り組みを繰り返していったところ、島内3か所でチドリの保全をしていきたいという声が上がりました。「淡路島ちどり隊」の結成です。



写真3. 突堤で休むシロチドリ。この浜にはかつては30羽ほどいたが、11月～2月は7羽しか見られなかった



写真4. 地元の人たちと一緒に営巣保護柵を設置した



写真5. 保護柵の中で抱卵するシロチドリ。すぐ近くにはレジャー客の姿が

<チドリを通じて自然海浜を守る「淡路島ちどり隊」>

チドリの繁殖には、餌となるゴカイや甲殻類など砂の中の生態系が豊かであること、ヒナの隠れ場所となるハマボウフウなどの海浜植物がセットで必要です。これはまさに、淡路島のもともとの自然海浜の姿そのもの。そこで淡路島ちどり隊は、“淡路島の資源であるチドリの保全を通じて、豊かな自然海浜を守ること”を活動の大きな目標としました。すると島内各地から「目の前の海を守りたい」「うちの浜でも活動できないか」「いなくなったチドリに戻ってきてほしい」という声が次々と上がりました。2022年4月現在、10か所の砂浜で合わせて24名が参加してくれています。77歳から最年少は小学4年生と、実に年齢層が幅広い。普段から保全活動をする団体だけでなく、ビーチクリーン活動の団体、地域活性化の活動をする団体、鳥類観察のスペシャリストなど、色んな分野の人たちがいるのも特徴です。

活動の内容は主に①生息状況の調査、②営巣・生息地の保護、③環境教育(写真6)の推進—の3つ。特に、メンバーからの要望が強いのが、③の環境教育です。あるメンバーの言葉が、強く胸に刻まれました。「慶野松原の海岸清掃を中学校のときからずっと続けてきた。チドリのことをもっと早く知っていたなら、いなくなる前に何かできていたかもしれないと後悔が残る。自分のような思いをしないように、子どもたちにちゃんとチドリのことを伝えていきたい」

他のメンバーたちも、子どもたちにチドリを通じて自然環境の大切さを伝えていくことが非常に重要だと考えています。まずは生息地周辺の小学校を対象に環境学習の実施を進め、ゆくゆくは島内に住むすべての子どもたちが一度はチドリについて学んだことがある状況をつくることを目標に取り組みを始めています。南あわじ市では5月に市長や教育長を含めた行政向け勉強会を開催したほか、淡路市では市の広報誌の5月号に特集でちどり隊の活動を取り上げてもらえました。



写真6. 観察会の様子。子どもたちは熱心にチドリを探す

私はこの春、大学院を卒業し札幌で就職しました。ちどり隊の活動はまだまだ始まったばかり。軌道に乗るまで繁殖期に月1回は淡路島に通い、地元の人たちと調査を行っていくことにしました。何年かかるかわかりませんが、しっかりと根付かせたいのです。そしてゆくゆくは淡路島だけでなく、全国で減少する砂浜を守っていけるようなムーブメントにしたい・・・それが私の願いです。

バードウォッチャーズ・スケッチブック

飲み会の言い訳でも カササギ

札幌市中央区 本間 康裕

「此頃（このごろ）都ニハヤル物 夜討（ようち）強盗 謀（にせ）論旨」というのは、14世紀、京の都に掲示された「二条河原の落首」なるものです（要するに、「最近、政情不安で、首都で流行しているのは夜襲や強盗、うその命令」という内容）。これにならって北海道のバードウォッチャーとしては「最近、道央で増えた鳥」というのを考えました。

「最近、道央圏で増えた鳥、カササギ、オオバン、ダイサギ」というのはどうでしょう（七五調になっていないのが、なんとも苦しいが）。いずれも以前は珍鳥だったり、見られなかったのに、現在（2020年代）は普通の鳥になっています。

<北海道にどこから来たのか>

このうち、気になるのはカササギです。ほかの2種は自然分布で間違いないと思うのですが、カササギは人為的移入の（つまり人が持ち込んだ）可能性があるのです。鳥類学者（肩書を書くともものすごく長いので省略）川上和人さんの「外来鳥ハンドブック」（文一総合出版）によれば、「北海道では1980年代から記録され繁殖もしている」として「移入分布と考えられることが多いが自然分布の可能性も否定できない」となっています。



2021.12.9 苫小牧市の勇武津資料館の公園で

カササギはアジア大陸には普通にいますから、ここからは想像ですが、①海を越えて北海道に飛んできた。②船員がペットとして飼っていて、船が着いた北海道で放した（逃げた）。③ロシアの港（たぶん）で停泊中の船のマストに止まったまま船が出港、そのまま航海して、北

海道で陸に降りた～などということが考えられています。どうも②③がクサイぞと思うのはロシアからの船の出入りが多い苫小牧から観察例が増え始めたからです。

増えた結果、道央圏では最近、札幌にもいる～というのですが、さすがに（ハシブトガラスやハシボソガラスのように）どこにでも見られるわけではありません。今回（2021年12月9日）、絵を描くために一番観察しやすい（と勝手に信じている）苫小牧市の勇武津資料館の公園に行くと例の「カシャカシャ」というハトロン紙（これまた古い）を丸めたような鳴き声とともに、白黒の姿をゲットしました。

<朝鮮半島由来のカササギと日本人>

さて、北海道での記録は1980年代から、ということですから、それ以前には道内にはいなかった（記録がなかった）のですが、じゃあ、それ以前に国内にはいなかったのかというと、そうではありません。九州の佐賀県には約400年前からいて、大正12年（1923年）には九州北部を生息地としてカササギが天然記念物に指定されています。

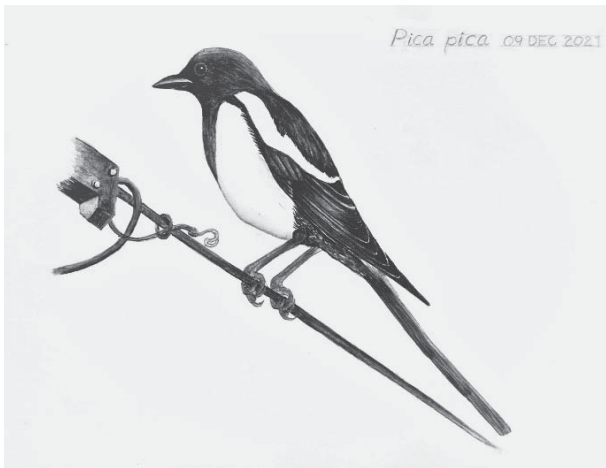
ところが、この個体群、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に朝鮮半島から持ち込まれたという話があるのです。先にも書きました「カシャカシャ」という鳴き声が「勝つ、勝つ」と聞こえて縁起がいい「かちがらす」として捕獲されて持ち込まれたらしいのです。この時の戦では陶工や儒者やらが日本に連れてこられたのですが、カササギもこうした戦乱に巻き込まれたということになりましょう。いやはや「戦争は最大の自然破壊」というのは今も昔も同じなんですね。

ではこの文禄慶長の役（16世紀）以前に、日本人はカササギを知らなかったのか、というと、これまた、そうではありません。皆さんもご存じ、百人一首にもとられた大伴家持の歌「かさゝぎの わたせる橋に をくしもの しろきをみれば夜ぞふけにける」にもカササギが登場します。この歌、万葉集にはなく、家持の自作ではないとも言われますが、家持が生きた8世紀には中国の文献などから、カササギは知られていたと考えていいでしょう。ちなみに先の「外来鳥ハンドブック」には「飛鳥時代の598年から輸入の記録がある」としており、一部の人たちは姿も見ていたのでしょうか（野生ではないけれど）。

さて、この歌ですが、「カササギが渡した橋に降りる霜の白いのを見ると、夜もふけたものだなあ」というような意味です。はて、「カササギの渡した橋」とはなんでしょう？ 島津忠夫訳注「百人一首」（角川文庫）によれば、「7月7日のたなばたの夜、かささぎという鳥が天の川に翼をひろげて橋を作り、織女星を渡したという伝説上の橋」ということです。なので、この伝説に従えば、この歌は「カササギが橋を渡したという天上の天の川を見ていると地上には霜が降りていて～」という意味になります。

一方、宮中を天上に見立てて「カササギが渡した橋」を実際の天の川ではなく、「宮中の（あるいは大きなお屋敷の）階（きざはし＝階段）」とみる考えもあります。これは壬生忠岑（みぶのただみね）という平安前期の歌人が詠んだカササギの歌が根拠になっています。

忠岑は「古今集」という歌集の選者であり、三十六歌仙（36人の有名歌人）の一人にも選ばれているのですが、身分は低く（なので生没年も不詳）、大納言、右大将であった藤原定国という人の隨身（お供）を務めていました。ある日、定国が酔っ払って夜更けに突然、上司である左大臣、藤原時平宅を訪問します。



2021.12.9 白と黒のコントラストが美しい

驚いた時平が「どこへ出かけたついでに立ち寄ったの

か」と怒って聞くと、お供の忠岑が屋敷の階のもとにひざまずいて「かささぎのわたせる橋の霜の上を夜半（よは）ふみわけてことさらにこそ」と即興の歌を詠みます。「カササギの渡した橋といわれる、このお屋敷の階の霜を踏み分けて、わざわざおうかがいしたのです。寄り道ではありません」というわけです。カササギを読み込んだ当意即妙の言い訳に時平は機嫌を直し、たちまち酒宴になったといます。「大和物語」という本にある話ですが、当然、原典ではなく安田章生「王朝の歌人たち」（NHKブックス 1975）によりました。

<令和の酒宴は風前の灯火ながら>

でも、こんな話って現代でもありそうです。例えば…
課長「ういーっ、係長。もう一軒行くぞ」
係長「課長だめですよ。夜遅くて、どこも店は開いていませんよ」
課長「よし、それなら近くに部長の家がある。そこで飲み直した。突撃！」
係長「ああ、ダメですったら」
部長宅の呼び鈴「ピンポーン」
部長「なんだ、君たちか。いったいどこで飲んだついでに寄ったのだ」
係長「いいえ、ついでではありません。ぜひ部長のお話をうかがいたくて…」

いやあ、日本の職場の飲み会というのは平安時代も昭和・平成時代あまり変わらない（進歩していないとも言える）ようです。

ところが、最近のコロナ禍で事情が変わり、飲食の場合は少人数で、マスク着用…って、これじゃあ職場での飲み会は事実上の禁止。酒好きや説教好きの上司には美風、一方、酒嫌いの人や、いやな部下がいる管理職には弊風だった平安以来の職場の風習も今や風前の灯火です。このように、職場の飲み会はどんどん減っているのに対して、飲み会の言い訳に使われたカササギのほうは人間界の事情にかかわらず、順調に生息域を広げているようです。（イラスト筆者）



バードウォッチャーズ・スケッチブック 原画展

2022年5月5日～6月30日

原画展を開催中です

5月5日から札幌市内で原画展を開催しています。北海道野鳥だよりに掲載したスケッチを中心に20点を展示しています。この機会に、カラーの原画をお楽しみください。

日時 6月30日(木)まで 午前11時～午後7時

場所 札幌市中央区大通西24丁目2-3
プレミエール円山1F チーズの店コンテ

☎011-624-7084
水曜日定休

私の探鳥地

鵜川流域で観察した7種のガン

胆振管内むかわ町 門村徳男

私が住んでいる胆振管内むかわ町の鵜川河口と流域の田園地帯では、さまざまなガン類が観察できます。通常はマガン、ヒシクイ、シジュウカラガン、最近ではハクガンも見られるようになりました。サカツラガン、コクガン、そしてアオガンを観察できたこともあります。

一般にはマガンが本州から北上してくるのは、まだ雪のある2月下旬ごろからですが、群れが来てからでも雪が降ることもあります(写真1)。苫小牧市のウトナイ湖が開ける前ごろですと、鵜川河口にも何千とねぐらを取ることもあります。それぞれの群れは離れますが、ときにはタンチョウ、オオハクチョウ、マガンなどが罾を取ります。川の水面が開けたときは水面に、または氷の上に、川が開けない時は牧草地の雪の上に取ったりします。



写真1. 畑の雪上に降りたマガンの群れ 2020.3.6

冬の鵜川は河口まで結氷してしまいますので、越冬はしません。でも隣町である日高管内日高町富川の沙流川河口の結氷は鵜川より少し遅いのです。沙流川河口へ行くと周辺の牧草地やデントコーン畑に12月でも2021年は3000羽くらいのマガンがいました。その中には15羽あまりのハクガンも交じっていました。また、少数のシジュウカラガンも。年によっては1月でも、それらの群れを鵜川上空で見ることがあります。ただ、鵜川流域の田園地帯を細かく車で走ると数十km、奥まで行くと100kmを超えることもあります。ですから私はあまり細かくは探しません。雪解けは海岸に近い所から通常始まるようですので、私はまず雪解けの早い所を探します。雪解けが進むと、探索は全町に広がります。そのころには北の隣町の胆振管内厚真町にもガン類は北上します。

むかわ町内の秋まき小麦畑で、2020年の2月24日にマガン、ヒシクイ、シジュウカラガン、ハクガン、サカツラガン(写真6)、そして希少なアオガン(写真7)と6種類を一点に立って観察できました。私が案内した知人は「宝くじに当たったみたいですね」と、一声あげました。

ただ最近では以前に比べると休耕、転作が進み稲作がピークの3分の1以下と少なくなりました。そのうえ秋の

うちに耕すので、ガン類が落ち穂拾いのできる田は少なくなっています。餌場となるのはデントコーン畑、秋まき小麦畑、牧草地などで、そこに入るのが多いようです。

ここからは私が鵜川流域で観察したガン類の特徴や印象について記します。

<マガン>

一番多いのがマガンです。海岸近くで見ていると海上から今渡って来たばかりと思われる群れも、ときには見られます。カギになり、竿になり海から飛んできたものが陸地に近づくあたりに入ると、その隊列がばらばらに崩れ、大きく拡がって、内陸に向かいます。

<ヒシクイ>

ヒシクイはマガンより大きく、顔や首はマガンより暗色に見えます。くちばしをよく見るとすぐに違いは分かるでしょう。亜種オオヒシクイと亜種ヒシクイがいるようですが、当地では亜種オオヒシクイ(写真2)が多いようです。私はあまりゆっくりと観察しないせいも、亜種ヒシクイを撮影したことはありません。



写真2. 亜種オオヒシクイ 2020.2.24

<シジュウカラガン>

シジュウカラガン(写真3)は十数年前には、いても1~2羽と見つけることが難しかったのですが、最近ではけっこう群れていますので、見つけやすくなりました。



写真3. シジュウカラガン 2020.2.22

喉の下が白く、頭部が黒く、足も黒いのです。渡って来た直後は、まとまっているようですが、その後はマガンの中にあちこちと散らばるようです。私はそのように感じます。

<ハクガン>

ハクガン(写真4)も十数年前には1羽、2羽とか、ときには5羽で見たことがあります。その後見えなくなりましたが、最近では20数羽~30羽前後、2020年2月下旬には一度だけ80羽の群れが、田んぼに入りました。その翌日も探しましたが、もう見えなくなりました。今後は毎年春には見えることに期待したいと思います。



写真4. ハクガン 2021.3.10

<コクガン>

コクガン(写真5)はマガモより少し大きいくらいの小型のガンで、首は比較的短く、体は黒色で、喉・脇・下腹・上尾筒・下尾筒は白く、嘴と足は黒いガンです。

十数年前、当時は鵜川の左岸にあった池に10羽近くが入り、見慣れない鳥だが何だろうと観察したのが初めてでした。その後、鵜川河口近くの本流に入り、それから5~6年渡来して、漁港で越冬しました。ときには陸に上がり、車からだの数mから十数mの距離で写真を撮りましたが、最近では来なくなりました。



写真5. コクガン 2006.12.31

<サカツラガン>

私が知る限りサカツラガンが鵜川へ来たのは2度です。1度目は2013年の春でした。2度目は2020年2月下旬、それもアオガンと同時期です(写真6)。

サカツラガンは大きく、嘴も首も長い。どちらかと言えばマガンの中というよりはオオハクチョウと行動を共にしていました。2013年も2020年も探し歩くと、オオハクチョウの中にいました。



写真6. サカツラガン 2020.2.24

<アオガン>

2020年2月下旬、マガンの群れの中にとっても目立つアオガン(写真7)を見つけました。この個体は2019年秋に宮城県の伊豆沼周辺で日本初記録、初越冬をしたものです。新聞報道によれば鵜川のあとは空知管内秩父別町、宗谷管内幌延町へと北上しました。

全長53~56cmと小型で、ガン類の中で最も美しい種と言われています。額から頭頂、後頸は光沢のある黒色、頭頂から目の周囲を通して喉まで黒色で、嘴から眼先に大きな白色斑、前頸から胸の赤褐色も目立ち、とても感動しました。

オビ川下流域からハタंगा川までの西シベリア極北部の内陸湿地で繁殖し、主に黒海北西部とカスピ海西岸で越冬すると言われています。



写真7. アオガン 2020.2.24

以上、私が観察した鵜川流域の7種のガンについて書きましたが、最近の研究や観察によると、カリガネも多少なりとも増えているようです。気長に観察すると会えるのではと思いますが、今後の課題にしたいと思います、元気に歩けるうちに撮りたいものの一種です。

シロフクロウ撮影記 ～探し続けて31年 5度目の正直～

紋別市 大館 和広



シロフクロウ 2022. 1.10 日の出岬 (オホーツク管内雄武町)

あれは忘れもしない1991年の晴れた元日でした。初日の出を見てからコムケ湖口橋(紋別市)で恒例の御神酒を挙げて友人と歩いていたら、カモメたちが沖で騒がしく「何だ?」と見たら「えー!」飛んで来たのはなんとシロフクロウでした。僅か2合の御神酒でこんなに早く御利益があったあーと喜びましたが、何故かカメラは車の中でした。手ぶらの私たちをあざ笑うかのようにヤツは金色の目を向けて30m横を飛んで行きました。2合ではここまでだったかー(来年からは4合にしようと思ったものです)。

シロフクロウとの最初の出会いは、1984年6月夕張岳山頂。高山植物に満足して登り、休んでいると「変な鳥がいる」と呼ばれ、ホシガラスでもいるのかな?と見に行くと、緑のハイマツの上に白いフクロウがいました。気持ちだけの望遠で慌てて撮った証拠写真は恥ずかしさと共に忘れましたが、真っ白の雄の成鳥でした。

2度目は同年9月秋の大雪山トムラウシ山。この年は大雪山や知床で目撃されて新聞記事になっていたのでロックガーデンの登りで探すと、いたいた遠くの岩峰です。なんとか双眼鏡でも識別できました。接近したかったのですが、登山道を外れるのはNGで、ガスったら最悪戻れない可能性もあるので我慢しました。頂上の帰り、崖下にクマを見つけて2時間付き合った後、振り返るとまだ岩峰にいたヤツは舞い上がって視界から消えました。

3度目は1985年7月大雪山北海岳。ガスの中、頂上目指して歩いていたら、突然目の前に現れて白い闇に消えました。一瞬に満たない出会いでした。

4度目は冒頭に記した1991年のコムケ湖での出会いです。それからというもの私はどこへ行っても、いつでも探し続けていました。背負うザックが重い山でも、肩こりに耐え双眼鏡をぶら下げていました。初冬の海岸では特に注意をし、白い塊は必ずチェックしました。沖のカモメが騒ぐのにも必ず目を向け、風の強い日は空に舞うレジ袋に何度も騙されながら、双眼鏡を覗きました。でもしかし、長い歳月が虚しくも過ぎてしまったのでした。

2022年1月10日、オホーツク管内雄武町・日の出岬。ガラス張りの展望台は好みではありませんが、真冬もトイレが使える貴重な場所です。定点観察地として年に何度か訪れますが、他の鳥見人には出会ったことがありません。この日も朝から風を避けて海上を見ていたのですが、大した鳥も出ないので11時ごろ帰ろうと車を走らせたなら、岬の端にカラスが集まっていました。「ナンダ?」と思って車を止め、見たら「えー!」シロフクロウ!! まず証拠写真を撮影。落ち着いて見ると手前のササなどが邪魔してました。気付かれぬよう?降りて三脚を立て再び撮る、撮る。そのうちカラスに追われて飛びました。車に戻り態勢を整え(なんの態勢だ?),飛んだ方向へそろりと行くと撮れたのが掲載の写真です。アングルを変えようと欲を出したのが失敗、飛ばれたー。カラスを連れて南東の空に遠く見えなくなりました。

この間11分、年初に運を使い果たした感ですが十分過ぎるお年玉でした。探し続けて31年、5度目の正直でした。カラスに感謝、そして私はまだまだ探し続けるのです。

2021年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録(2021.4~2022.3)

科・種名	探鳥地	いしかり調整池					記録回数
		10月2日	10月10日	11月7日	11月14日	12月5日	
カモ科							
ヒシクイ				●		1	
マガン	●					1	
コブハクチョウ				●		1	
オオハクチョウ				●		1	
オカヨシガモ				●		1	
ヨシガモ				●		1	
ヒドリガモ				●		1	
マガモ		●	●	●		3	
ハシビロガモ				●		1	
オナガガモ	●			●		2	
コガモ		●	●			2	
キンクロハジロ		●	●			2	
ミコアイサ				●		1	
カワアイサ				●		1	
カイツブリ科							
カイツブリ		●	●	●		3	
アカエリカイツブリ				●		1	
ハト科							
キジバト	●					1	
アオバト		●				1	
ウ科							
カワウ				●		1	
サギ科							
アオサギ	●					1	
ダイサギ	●	●		●		3	
チュウサギ	●					1	
コサギ	●					1	
クイナ科							
オオバン			●	●		2	
シギ科							
タンギ	●					1	
オグロシギ	●					1	
ツルシギ	●					1	
コアオアシシギ	●					1	
タカ科							
トビ	●			●		2	
オジロワシ				●		1	
オオワシ				●		1	
ハイタカ				●		1	
ノスリ				●		1	
フクロウ科							
フクロウ			●		●	2	

科・種名	探鳥地	いしかり調整池					記録回数
		10月2日	10月10日	11月7日	11月14日	12月5日	
キツツキ科							
コゲラ			●	●	●	●	4
オオアカゲラ				●		●	2
アカゲラ	●	●	●			●	4
クマゲラ				●			1
ヤマゲラ				●		●	2
モズ科							
モズ	●						1
カラス科							
ハシボソガラス				●	●	●	3
ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●	5
クイタダキ科							
クイタダキ						●	1
シジュウカラ科							
ハシブトガラ			●	●	●	●	4
ヤマガラ			●	●	●	●	4
ヒガラ			●			●	2
シジュウカラ			●	●	●	●	4
ヒバリ科							
ヒバリ	●						1
ヒヨドリ科							
ヒヨドリ			●	●	●	●	4
ウグイス科							
ヤブサメ			●				1
エナガ科							
エナガ					●	●	2
メジロ科							
メジロ			●				1
ゴジュウカラ科							
ゴジュウカラ			●	●	●	●	4
キバシリ科							
キバシリ			●				1
ヒタキ科							
ツグミ				●		●	2
セキレイ科							
ハクセキレイ	●						1
アトリ科							
カワラヒワ	●						1
ウソ						●	1
ホオジロ科							
カシラダカ				●			1
アオジ			●				1
観察種類数		18	19	20	30	17	
参加者数		27	41	16	9	31	

※1 5回実施。他はすべて新型コロナウイルス感染防止のため中止。
 ※2 総観察種 25科 60種、1回平均 20.8種（前年度：33科 86種、1回平均22.5種）
 ※3 延参加者数 124人、1回平均 24.8人（前年度：260人、1回平均32.5人）

2022年度総会報告

日 時：2022年4月13日(水) 14：00～15：30

場 所：かでの2・7 110会議室

樋口孝城会長挨拶のあと、議長に栗林宏三氏を選出した。審議のうえ、原案通り可決、承認された。

(議事)

1. 2021年度事業報告

[総務]

- (1) 野鳥写真展の開催 (ほくでんギャラリー)
期 間：2021年5月10日(月)～21日(金)
出 展：15名 29点
引き続き7月1日(木)～31日(土)
野幌森林公園自然ふれあい交流館で開催
- (2) 「北海道野鳥だより」の発送「204号～207号」
- (3) 新年講演会・野鳥写真映写会：中止
- (4) 北海道野鳥愛護会の名前入りカレンダーの作成・販売
中止
- (5) 定例役員会の開催 (毎月1回、計12回)：新型コロナウィルスの影響により、5月・6月・7月・8月・9月・2月・3月の役員会を中止
(中止月はメーリングリストにより、代替討議)
- (6) 傷害保険の更新 (対象者 260名 保険料¥5,200円)

[広報]

- (1) 「北海道野鳥だより」の発行「204号～207号」
(野鳥だより編集委員会)
- (2) 北海道野鳥愛護会ホームページの維持・運営
(ホームページ運営委員会)
- (3) 年間予定表の各施設への配布

[探鳥]

- (1) 探鳥会の開催 5回 (延参加者数124人 1回平均248人) 4月・5月・6月・7月・8月・9月：中止
10月 (2回)・11月 (2回) 12月 (1回)：実施
1月・2月・3月：中止
- (2) 宿泊探鳥会・小樽港探鳥会：中止
- (3) いしかり調整池環境保全活動
・6月18日に花壇の植栽
・8月31日・10月2日・10月10日・10月29日に清掃活動を実施した。

[その他]

- ・会員数の減少傾向：増加活動を実施したい。
- ・事務所を移転した。
- ・収支均衡のために支出削減を図った。
(印刷費の低減・発送業者の変更・会員外のPDF送付)

2. 2021年度決算報告

2021年度決算報告書 (別掲の通り)

3. 会計監査報告

白澤昌彦監事から適正処理の報告があり、承認

4. 2022年度事業計画

[総務]

- (1) 野鳥写真展の開催
期 間：2022年5月10日(火)～23日(月)
午前9時～午後6時
場 所：エルプラザ2F 環境プラザ・交流広場
引き続き6月1日(水)～6月30日(木)
野幌森林公園自然ふれあい交流館で開催
- (2) 「北海道野鳥だより」の発送「208号～211号」
- (3) 新年講演会・野鳥写真映写会の開催
会場・内容未定：9月頃までに可否を決定
- (4) 定例役員会の開催 (毎月1回、計12回)
- (5) 傷害保険の更新
- (6) 関連団体との協力 (野幌森林公園を守る会など)

[広報]

- (1) 「北海道野鳥だより」の発行「208号～211号」
(野鳥だより編集委員会)
- (2) 北海道野鳥愛護会ホームページの維持・運営
(ホームページ運営委員会)
- (3) 年間予定表の各施設への配布

[探鳥]

- (1) 探鳥会の開催 29回 (1月に野幌森林公園を追加)
・宿泊探鳥会：今年度は中止、次年度以降については実施の可否・方法等を含めて検討する。
- (2) いしかり調整池環境保全活動：継続実施
- (3) テストケースとして茨戸川緑地探鳥会を計画
6月4日(土)9：00～

5. 2022年度予算

2022年度予算書 (別掲の通り)

6. 2022年度役員人事

品川睦生幹事・佐々木 裕幹事：退任
大垣 創：新任 幹事 (探鳥)

顧問 藤巻裕蔵、小堀煌治、戸津高保
 会長 樋口孝城
 副会長 富川 徹、栗林宏三、横山加奈子
 監事 白澤昌彦、松原寛直
 代表幹事 畑 正輔
 幹事
 (総務) ◎辻 雅司、竹内 強、中村 隆、
 畑 正輔(兼)、田中冬彦
 (会計) ◎横山加奈子(兼)、原 美保、浜野チエ子

(探鳥) ◎早坂泰夫、梅木賢俊、門村徳男、
 北山政人、道場 優、鷺田善幸、
 佐藤ひろみ、富川 徹(兼)、白田 正(兼)、
 栗林宏三(兼)、新城 久、鈴木幸弥、
 藤吉 功、大垣 創
 (広報) ◎國本昌秀、樋口孝城(兼)、川路則友、
 道川富美子、中田達哉、白田 正、
 先崎理之

◎：各担当代表

2021年度 決算書

(収入の部)

項目	2020年度決算	2021年度予算	2021年度決算額	予算比(▲減)	備考
個人会費	481,000	466,000	503,000	37,000	
家族会費	171,000	150,000	155,000	5,000	前納、後納を含む
団体会費	5,000	5,000	5,000	0	
活動収入	6,000	110,000	1,500	▲108,500	道庁
雑収入	43,540	67	21,701	21,634	利息、役員会中止 還付金他
寄付金	10,300	10,000	6,000	▲4,000	個人寄付
小計	716,840	741,067	692,201	▲48,866	
繰越金	348,753	258,933	258,933	0	
合計	1,065,593	1,000,000	951,134	▲48,866	

(支出の部)

項目	2020年度決算	2021年度予算	2021年度決算額	予算比(▲減)	備考
印刷費	468,380	440,000	422,836	▲17,164	野鳥だより印刷費他
通信費	210,272	202,000	196,979	▲5,021	会報送費、切手代、 ホームページ維持費
会議費	56,600	42,100	40,600	▲1,500	役員会、総会会場費
活動費	0	94,000	8,100	▲85,900	
消耗品費	17,008	27,000	5,208	▲21,792	事務用品他
事務所費	40,000	40,000	40,000	0	事務所費用
傷害保険費	14,400	5,200	5,200	0	保険代
雑費	0	10,000	0	▲10,000	設備利用料他
予備費	0	139,700	0	▲139,700	
基金積立	0	0	0	0	
小計	806,660	1,000,000	718,923	▲281,077	
次年度繰越	258,933	0	232,211	232,211	当年度余剰金
合計	1,065,593	1,000,000	951,134	▲48,866	

2022年度 予算書

(収入の部)

項目	2022年度予算	2021年度決算	増減	備考
個人会費	520,000	503,000	17,000	
家族会費	150,000	155,000	▲5,000	前納、後納を含む
団体会費	5,000	5,000	0	
活動収入	111,000	1,500	109,500	講演会、小樽探鳥会
雑収入	1,789	21,701	▲19,912	利息他
寄付金	10,000	6,000	4,000	個人寄付
小計	797,789	692,201	105,588	
繰越金	232,211	258,933	▲26,722	
合計	1,030,000	951,134	78,866	

(支出の部)

項目	2022年度予算	2021年度決算	増減	備考
印刷費	388,000	422,836	▲34,836	野鳥だより印刷費
通信費	161,000	196,979	▲35,979	会報送費、切手代、ホームページ維持費
会議費	42,100	40,600	1,500	役員会、総会会場費
活動費	94,000	8,100	85,900	会場費、バス代
消耗品費	25,000	5,208	19,792	事務用品他
事務所費	40,000	40,000	0	
傷害保険費	2,500	5,200	▲2,700	保険代
雑費	10,000	0	10,000	設備利用料他
予備費	267,400	0	267,400	
基金積立	0	0	0	
小計	1,030,000	718,923	311,077	
次年度繰越	0	232,211	▲232,211	
合計	1,030,000	951,134	78,866	

積立基金特別会計

(2021年度収支決算)

項目	金額
積立金	246,990
一般会計より繰入	0
支出	43,000
差引合計	289,990

(2022年度収入予算)

項目	金額
積立金	289,990
一般会計より繰入	0
合計	289,990

会員数

	2018. 4. 1	2019. 4. 1	2020. 4. 1	2021. 4. 1	2022. 4. 1
個人	274名	261名	252名	238名	246名
家族	119名(51家族)	132名(59家族)	135名(60家族)	120名(53家族)	117名(51家族)
団体	1会員	1会員	1会員	1会員	1会員
合計	394名	394名	388名	359名	364名



円山公園

2022. 3. 6

新型コロナウイルスの影響で中止

【幹事による状況報告】 梢のハシブトガラやシジュウカラが光あふれる青空を背に囀っていました。姿は確認できませんでしたが、ウソの鳴き声が2か所で聞こえました。

【参考記録】 アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、スズメ、ウソ

ウトナイ湖

2022. 3. 20

新型コロナウイルスの影響で中止

【幹事による状況報告】 道の駅展望台と湖畔の四阿^{あがたま}で観察しました。大雪の影響からか、マガンやヒシクイも見られずカモ類もヨシガモ、カワアイサにとどまりました。対岸の氷上などにオオワシ、オジロワシが止まっていました。

【参考記録】

ヨシガモ、カワアイサ、アオサギ、オジロワシ、オオワシ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ツグミ

モエレ沼

2022. 4. 10

札幌市北区 辰巳 研一



キンクロハジロ、ヨシガモ、ヒドリガモ(午前から) 筆者撮影

2年ほど前に入会させていただきました。コロナ禍のため、今回初めて参加させていただきました。今年は雪が多く、冬の間あまり鳥をみることもできず、今回の探鳥会を楽しみにしていました。残雪も多く、緑もまだ少ないので、参加者はそう多くはないだろうと思っていましたが、40名ほどいらっしゃったのでしょうか、大変盛況でした。

最初、橋の上から、ヒドリガモ、オオバン、ミコアイサ、ハシビロガモ、アオサギなどが見られました。多くの

目があると、鳥を素早く見つけられて、ありがたいです。ヒドリガモが多い中、カワウ、カモメ(ただの)、カワアイサなど、誰かが見つけて教えていただきました。

幹事から、カモメとオオセグロカモメやウミネコの違い、カワウかウミウの判断の仕方、カワアイサとウミアイサの季節性、ヨシガモの特徴など教えていただき、勉強になりました。雪が解けたばかりで、水鳥が中心でしたが、オオジュリンなども今年初めて見られてよかったです。

最後の鳥合わせでは、30種ほど確認出来たようですが、コハクチョウ、オカヨシガモ、オナガガモ、コチドリ、ホオジロ、ベニマシコ(声は聞こえた)、ハイタカと他の人が確認出来たのに、見られなかった鳥が多くいて少し残念でした。

初め曇りでしたが、後には晴れ、風もなく、最高の探鳥日和でした。コロナ禍で、探鳥会を開催するかどうか、たいへん迷われたとのこと、役員の方々は大変ご苦労されていらっしゃると思います。本当にありがとうございます。また参加します。

【記録された鳥】 コハクチョウ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、カワウ、アオサギ、オオバン、コチドリ、カモメ、トビ、ハイタカ、ノスリ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオジロ、オオジュリン 以上34種

【参加者】 阿部昌子、今村三枝子、大表順子、大西智子、大橋 晃、鎌田要子、川崎 純、北山政人、栗林宏三、小谷内久江、近藤章子、齊藤潤太郎・律子、新城 久、高橋きよ子、高橋良直、辰巳研一、辻 雅司、鳥谷峰 修・由紀・心、西窪翠子、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、平岡信夫、福島 文、藤吉 功、本間康裕、松尾賀津代、丸尾誠一、丸島道子、丸勢文現・亜希子、南 貴和子、宮腰淳司、宮崎美千代、横山加奈子、吉田慶子、吉見孝夫・紫乃 以上42名

【担当幹事】 北山政人、樋口孝城

野幌森林公園

2022. 4. 17

江別市 武藤 幹太

昨年より鳥見を始め、野鳥観察歴は1年ほどです。普段はカメラ片手に一人で歩いていることが多いのですが、森で行き交う親切な先輩方に教わりながら独学で観察をしていました。今年に入ってすぐに野鳥愛護会へ入会し、待望の探鳥会への参加となりました。

集合場所に参加者が揃ったところでコース説明があり、さっそく森へ入りました。すると、程なくカラ類が出迎えてくれました。私一人だったら足早に通り過ぎるようなポイントでしたが、鳥たちとの出会いに皆さん嬉しそうです。

一期一会を大切にその姿にならい、私もしばし足を止めて楽しみました。

そんなペースでゆっくり進んでいくと、木の枝に丸いものがぶら下がっているを見つけました。双眼鏡で覗くと細い植物などで編み込まれているようです。幹事の方に向かってうかがうと、去年使われていたメジロの巣だろうとのこと。木の上の方、枝の中程に綺麗に作られた巣でした。実際に使われていた頃は葉が茂り、周りからは見えなくなっていたと思われます。皆さんと足を止めながら、ゆっくりと進んでいたからこそ気づくことができました。



メジロのものと思われる古巣 筆者撮影

そしてもう一つ素晴らしいシーンに出会いました。ゴジュウカラのリフォーム作業の様子です。キツツキが使っていた巣穴を、使いやすいサイズにする為に、泥で固めた壁を作るのだそうです。まさしくその通り、入口を小さくしようとせっせと作業をする健気な姿を観察することができました。コース終盤には、クマガエラの声が聞こえました。主役の登場かと色めきましたが姿は見えませんでした。

最後はお楽しみの鳥合わせです。今回観察されたのは全部で21種。その内、私が実際に見たのは14種でした。次回は全種類観察したいと思います。それにしても皆さん鳥を見つけるのが早い。私も先輩方に近づけるよう精進します。皆さんと一緒に鳥を探し、たくさんのお話を教えてもらい、楽しく学ぶことができた探鳥会でした。

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、クマガエラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、アオジ 以上21種

【参加者】 会川 隆、石井正訓、今村三枝子、内山英晋、数田真弓、栗林宏三、小西美美枝、甚内雅子、高橋貞夫、辰巳研一・昌江、辻 雅司・方子、道場 優、鳥谷峰修・心、長野隆行、西窪翠子、畑 正輔、早坂泰夫、福士一徳、藤吉 功、前寺博篤・恭代、松原寛直・敏子、宮腰淳司、武藤幹太、本杉政司・朋子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 以上33名

【担当幹事】 栗林宏三、藤吉 功

宮 島 沼

2022. 4. 24

春らしい青空でしたが、強風のためマガンは周辺の田畑にとどまり、ほとんど沼に戻ってきませんでした。それでも時々、頭上を飛び交うマガンの声を聞いたり、ヨシ原に來たノビタキを楽しみました。オオタカが2回出たのが特筆です。

【記録された鳥】 ヒシクイ、マガン、コハクチョウ、オオハクチョウ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、キジバト、アオサギ、トビ、オオタカ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ムクドリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、アオジ、オオジュリン 以上23種

【参加者】 石塚 肇・鈴子、今村三枝子、白田 正、岸谷美恵子、北山政人、國本昌秀、栗林宏三、小林敦実・恵、小谷内久江、近藤章子、佐藤ひろみ、新城 久、高橋きよ子、辻 雅司・方子、鳥谷峰 修・由紀・心、西倉陽子、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、松山由美子、本間康裕、武藤幹太・大翔、本杉政司・朋子、吉田慶子 以上32名

【担当幹事】 栗林宏三、佐藤ひろみ

表紙の鳥

オオアカゲラ



例年冬鳥を求めて12月、1月に探鳥会に参加させていただいていますが、今年は4月のモエレ沼探鳥会に合わせて訪問いたしました。朝6時50分羽田発の飛行機に乗ると、11時30分には札幌の真駒内公園に着ける便利な時代になりました。

公園の周回道路を歩いていると、冬場閉鎖されているトイレ近くの白樺林の中に野鳥を見ている数人がいらして、オオアカゲラがいるとのことで、ご一緒させていただきました。

雌(右)がいたところに雄がやって来ました。その後、飛び立った雌を追って雄も飛び立って行きました。

平岡 信夫 (東京都品川区)



新型コロナウイルス感染症の状況で中止の場合があります。開催の有無は当会ホームページを前日夜に確認ください。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-876-8546
10:00~16:00 (土日、祝祭日を除く)

鳥民だより

◆2022年度 野鳥写真展 出展者・作品◆



5月10日(火)~23日(月) 札幌エルプラザ2F

- 大垣 創・・・ハシブトガラ、ハクガン
- 近藤 章子・・・ハクガン、エゾライチョウ
- 佐伯 武美・・・コオバシギ、ノゴマ
- 佐藤ひろみ・・・コマドリ、クロジ
- 漆崎 修・・・チュウシャクシギ、ハクガン・ヒシクイ
- 品川 睦生・・・オシドリ、カワセミ
- 高島 均・・・ハシブトガラ、ヒバリ
- 高橋 良直・・・ショウドウツバメ、マガン
- 辰巳 研一・・・キレンジャク、フクロウ
- 辰巳 昌江・・・アカモズ、クロジ
- 田中 陽・・・アカアシシギ、オオワシ
- 富川 徹・・・タ日とマガン、タンチョウ
- 中村 隆・・・フクロウ、クマゲラ
- 中村俊太郎・・・ヒバリ、ノビタキ
- 早坂 泰夫・・・キレンジャク、オオタカ
- 平岡 信夫・・・ノビタキ、イスカ
- 藤吉 功・・・バン(幼鳥)、バン(親子)
- 武藤 幹太・・・アオサギ・ダイサギ、オジロワシ
- 吉川 健一・・・コアカゲラ

以上19名37点

※野幌森林公園自然ふれあい交流館展示(6月30日まで)後、
当会HP「Photo Album→WEB版野鳥写真展」で閲覧可能。

【新しく会員になられた方々】

- 西窪 翠子(札幌市西区)
- 福島 文(札幌市中央区)
- 宮腰 淳司(札幌市北区)
- 杉山 次郎(札幌市中央区)
- 小林 恵(札幌市北区)
- 浅野サチ子(札幌市中央区)
- 佐川 健次(札幌市白石区)
- 斉藤 一史・亜矢子(千歳市)
- 市橋 栄二(札幌市中央区)
- 萬谷慎太郎・利久子(札幌市南区)
- 牧野 紀夫(札幌市南区)
- 田口 精一・麻衣子(千歳市)

【野幌森林公園】2022年7月10日(日)、9月11日(日)

7月と9月とではそれぞれ異なる趣があります。午前中に
に終えられるよう探鳥コースを変更する場合があります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00
交 通：JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)
「文京台南町」下車 徒歩10分

【石狩川河口】2022年8月21日(日)

石狩浜・河口でシギ・チドリ、草地でホオアカやノビタ
キなどを見ます。はまなすの丘公園ビジターセンター前
から浜に出て河口まで、河口からは石狩川に沿って戻りま
す。正午ごろに鳥合わせをして解散します。

集 合：はまなすの丘公園ビジターセンター駐車場
9:30
交 通：中央バス 札幌ターミナル発(石狩行)
「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】2022年8月28日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でシギ・チドリを探
鳥します。人工干潟付近で鳥合わせをして解散します。

集 合：道の駅むかわ四季の館駐車場 9:45
交 通：探鳥会予定表にある「高速ペガサス号」がダイ
ヤ縮小で開始に間に合いません。以下を利用ください。
・JR札幌駅発 6:18⇒苫小牧駅7:45着(JR乗換え)
苫小牧駅発 7:52⇒鶴川駅着 8:20 下車 徒歩10分
・JR札幌駅発 7:01⇒苫小牧駅 8:15⇒道南バス8:55
⇒鶴川駅前 9:59 下車 徒歩10分 こちらを利用の方
は事前にご連絡ください。開始時刻を過ぎても幹事が
待機します。(問い合わせ)畑正輔 総務幹事 090-3117-4261
※帰路は13:15発の高速ペガサスが利用可能。

【いしかり調整池】2022年9月4日(日)

この時期のシギ・チドリを主に観察します。水鳥を狙っ
て猛禽もやってきます。11:30ごろに鳥合わせをして解散
します。

集 合：いしかり調整池駐車場 9:30
交 通：公共の交通機関はありません。

【宮島沼】2022年9月25日(日)

秋のマガン渡来のピークを迎えます。ヒシクイ、ハクチ
ョウ、カモ、カイツブリ類などの姿も。猛禽が出ることも
あります。11:30ごろに鳥合わせをして解散します。

集 合：湖畔 10:00
交 通：中央バス 岩見沢ターミナル発(月形行)
「大富」下車 徒歩15分

☆雨具、観察用具、筆記用具などお持ちください。

☆悪天候で中止の場合があります。

【北海道野鳥愛護会】年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38 北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 ☎(011)876-8546

HPのアドレス <https://aigokai.org>